

特集
全国よい仕事研究交流集会2017

②

1989年5月19日、20日に208名の参加で第1回よい仕事研究交流集会を開催した。この集会時の最大のテーマは「今、なぜ『よい仕事』なのか」であった。今、ワーカーズコープで働きながら、「よい仕事」をすること、目指すことは当たり前のように思うが、28年前は当たり前ではなかったことが伺える。

原則は1979年から今まで、4回改訂されている。1979年の「事業団7つの原則」から2015年の「『協同労働の協同組合』新原則」まで、一貫して「よい仕事」の原則が盛り込まれ、1992年原則は第2原則であるが、その他の原則には第1原則に記載している。そのことを考えると、日常の実践を通して得られた学び、教訓を原則にしながらも、原則を通じて労働者協同組合、協同労働の協同組合は、「よい仕事」を目指す組織であることを位置づけ、共有した歴史がある。そして「よい仕事」の実践・研究の場として「よい仕事研究交流集会」が位置づけられてきた。

直近4年間の集会スローガンは以下の通りである。

2014年「協同労働の『よい仕事おこし運動』を職場から地域へ～人が育ち・学び・つながる、地域がつながり、みんなで支え合う本物の豊かさを、自分たちでつくり出す、地域の文化と仕事の創造」

2015年「はたらくことは人と命につながるもの 社会的孤立と排除を抗し、『ともに生きる』地域をつくる－自らの果たすべき役割を問う－」

2016年「市民の手、市民の主体的力による新しい地域、新しい社会づくりは可能か 協

同労働・社会連帯による地域からの新しい生活・文化運動の創造へ」

2017年「市民自らが地域・社会をつくる時代を切り拓く－『社会連帯経営』の深化が『よい仕事』の全面的発展を促す」

この4年間、よい仕事研究交流集会報告集を編集した立場として感じることは、「私たちが地域を変える」という視点から、「市民自らが地域を変える」視点に変わってきていることである。つまり、よい仕事観がワーカーズコープで働くものたちだけのものではなく、よい仕事をする主体に市民・住民がなり始めている、またはそれを目指す方向に集会のテーマがなっている。「広島市『協同労働』プラットフォーム事業」などの実践が進み、実体をつくりながら、この4年間での「社会連帯経営」が進化している。そして「協同労働の協同組合法」成立を目前にしているなかで、市民が協同労働で仕事おこし、まちづくりを各地で展開する萌芽が生まれる情勢にある。

時代とともに「よい仕事」観は変化する。それは社会が絶えず変化するなかで、協同労働の協同組合の社会的価値や役割が変化しているからである。

第1段階は、自分たちが行っている仕事の中でのよい仕事とは何かを深めていったが、まちや地域といった公共的視点や社会を変えるという本質的な問題は、現場で議論にならなかった。

第2段階は介護保険など、社会にとって不可欠な仕事をするようになると、「仕事おこし」の発想が大きな意味をもつようになる。「人と地域が必要とする仕事をおこす」段階になったとき、それまでの「よい仕事」とは違うレベルに入ったのではないか。委託された仕事をしっかりやり、評価されても、仕事の中身は委託した人によって決定されるわけだから、よい仕事の半ばまでしかいかない。

第3段階は、林業・農業の延長線上に、まちおこし、むらおこしの事業が展望できるところまできた。地域を新たに発展させ、地域住民の自覚を高め、まちづくり、村づくりを住民自身で行なっていくことにつながる。

*1

この3段階をみていると、よい仕事をする主体は「はたらくもの」(第1段階)→「公共的視点を持ったはたらくもの」(第2段階)→「働くものと地域住民(第3段階)」となっており、よい仕事をする主体の深みや厚みが実践のなかで、つ

*1「協同の発見」誌282号(2016年5月号)P.124-P.134「協同労働の協同組合の「よい仕事観」の変遷
～永戸祐三労協連理事長へのインタビュー～

くられてきたのではないか。

大切なことは「よい仕事はこれだ」と定義づけることではなく、絶えず進化・発展・変化するなかで、自らの言葉で「よい仕事」を語り、まとめていくことが重要ではないか。感想文を読みながら、人の数ほどよい仕事観は存在すると感じた。そのよい仕事観を大切にしながら、ワーカーズコープが社会でどのような役割を果たしたいのかを絶えず考えていくことが必要である。その意味で心に留めたいことは「協同労働の協同組合新原則 第1原則に『仕事をおこし、よい仕事を発展させます』」とあるように、よい仕事は協同労働の協同組合の事業・運動の生命線であり、「よい仕事とは何かを絶えず問い続けること」がよい仕事をする

第1条件であるのではないかと考えている。

労働者協同組合、協同労働の協同組合の仕事の中でのよい仕事観から、地域社会にとってのよい仕事観へ。社会観、人間観、歴史観を兼ね備えた仕事観をもち、伝え、発信していくことが、研究所としての1つの大きな役割だと感じている。

最後に分散会会場をお貸しいただいた明治大学の中川雄一郎さん(協同総研副理事長)、コメンテータの皆さん、各事業本部事務局長、執筆者の皆さん他、各位のご尽力があり、今年も2冊の報告集にまとめることができたことを感謝申し上げます。

(協同総合研究所 事務局長 相良 孝雄)